

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：47704

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05800・19K20992

研究課題名（和文）遊びの場面における聴覚障害児と母親の視線共有および母親の働きかけの特徴

研究課題名（英文）Eye-Gaze Sharing Between Young Children with Hearing Impairment and Their Mothers in Free Play: Characteristics of Approaches Taken by Mothers

研究代表者

本田 和也（HONDA, Kazuya）

鹿児島女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：50828027

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、母子の視線共有が前提となるおもちゃを介した遊びにおいて、共同注視や共同注意が形成される生後9カ月から12カ月の時期に、聴覚障害児ごとで母親を注視する行動に差が生じているのか、子どもとの視線共有を図るために、母親はどのような方略を通して子どもの注意を引きつけてかわっているのかを検討した。その結果、すでに生後9カ月以前の聴覚障害児において、母親を注視する行動には差があることが推測された。また、母子の視線共有には、それまでの子どもにとっては受容的ともいえる母親の子どもを引きつける方略が重要であることが推測された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

聴覚障害児が、共同注意を形成するに当たって、その前提となる母子の視線共有の成立が重要となる。しかし、生後1年以前の段階で、母子により視線共有に差があることを明らかにした。また、母親の話ことばに合わせて、「指さし」「提示」「身振り」「操作」などを用いることが、聴覚障害児の注視の促しに有効であることを明らかとした。

聴覚障害児の心の理論獲得は、健聴児と比較して、遅れることが知られているが、その要因の一つが、生後1歳までの母親のかかわりであることを示唆した、本研究の学術的意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we included 9- to 12-month-old hearing-impaired children, who had achieved joint attention or shared attention. They were invited to a free-play session for analysis of mother-child eye-gaze sharing. The purpose of this study was to identify differences in mother-directed gaze between young children with hearing impairment. In addition, we investigated mothers' approaches to mutual eye-gaze with their child by analyzing the ways of engaging their child's attention. The result clarified that there are likely to be differences in mother-directed gaze between hearing-impaired children younger than 9 months. In other words, receptive approaches by mothers such as attempts to attract their child's attention are considered important for mother-child eye-gaze sharing.

研究分野：特別支援教育

キーワード：聴覚障害 視線共有 共同注意 母子 働きかけ

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

乳児期の言語の発達には、身近な大人、特に母親による働きかけが重要な役割を果たしている。母親は、子どものわずかな表情等の変化を捉えて、言葉掛けや身振り、表情等で応答し、相互的なかわりの「足場づくり」を自然に行い、その結果、子どもは母親とのやりとりが可能になる（吉田，2011）。これらの母親の働きかけは、乳児の言語獲得を促進することが知られている。このことは、聴覚に障害のある（以下「聴覚障害」とする）子どもの場合も同様である。しかし、聴覚に障害のない（以下「健聴」とする）子どもと比較すると、聴覚活用に困難さがあるため、母親の音声を知覚・認知することには、必然的に制限が生じる。そのため、母親が聴覚障害児（以下場合によっては「子ども」とする）とやりとりを成立させるためには、音声以外の手段でやりとりすることが重要となる。

本田（2018b）は、2歳の聴覚障害児と母親のおもちゃを介した遊び場面において、母親が視線共有を図りながら手話・身振り・指さし（以下「手話等」とする）を使用することが、母子の相互作用を高めることを示した。そして、母親の子どもへの注視時間が長ければ、視線のやりとりや情動共有が可能となり、結果として、子どもから母親への注視も増加することを示唆している。

本田（2018b）の研究で、聴覚障害の場合、母親の働きかけの違いで、2歳の子どもが母親を注視する時間に差があることが示されたが、それならば、子どもが母親を注視する時間や回数に差が生じるのは、いったいいつ頃からなのだろうか。

一般的に、子どもは共同注視や共同注意が形成され始める生後9カ月頃から、物を介して母親との遊びが成立するようになる（Werker & Tees, 1984）。共同注意とは、「子どもと大人が、注意の対象を共有し、さらにお互いがそのことを知っていて、情動を共有する」ことであるとされている（徳永，2009）。しかし、子どもの聴覚に障害がある場合は、聴覚活用に困難さが伴うため、母親が言葉掛けで子どもの注意を引きつけたり、子どもが音声で母親の注意を引いたりすることが困難になる。それゆえ、聴覚障害児と母親が共同注視や共同注意を成立させるためには、子どもと母親のやりとりにおいて、音声以外で、お互いの注意を引きつけたり、視線を共有したりすることがより重要となるとの指摘がある（本田，2015）。

しかしながら、このような共同注視や視線共有について、本田（2018b）の研究では、母親の働きかけの違いで、聴覚障害児の行動が異なることが示されているが、より早期の段階の聴覚障害児の行動の違いを研究したものはほとんどない。また、共同注視や視線共有は健聴児では、生後9カ月頃に可能とされているが、聴覚障害児の行動を検討したものは少ない。

### 2. 研究の目的

本研究では、母子の視線共有が前提となるおもちゃを介した遊びで、共同注視や共同注意が形成される生後9カ月から12カ月の時期において、聴覚障害児ごとで母親を注視する行動に差が生じているのかを検討することを目的とした。また、母子の視線共有を図るためには、母親の手話等の使用が有効（本田，2018b）であるが、生後9カ月から12カ月の聴覚障害児は、補聴器の装用を開始して間もないこともあり、音声言語である日本語の理解やその意味を補完する手話等の理解が困難である可能性がある。そのような状況において、母親はどのような方略を通して子どもの注意を引きつけてかわっているのかを検討した。

観察調査は、20xx年9～10月～20xx+6年7～9月、Z特別支援学校幼稚部プレイルーム、または、対象児の自宅で実施した。

### 3. 研究の方法

対象児は、Z特別支援学校（聴覚障害）幼稚部の「乳幼児教育相談」に通う0歳児（月齢：10～12カ月）グループの聴覚障害児6名（A～F児）で、①聴覚障害以外の障害の診断を受けていないこと、②裸耳両耳平均聴力が80 dBHL以上とした（表1）。また、全員補聴器を装用していたが、装用を開始して間もないこともあり、音への反応はあまり見られなかった。母親は全員健聴であり、対象の家族は、対象児以外全員が健聴であった。

観察調査は、20xx年9～10月～20xx+6年7～9月、Z特別支援学校幼稚部プレイルーム、または、対象児の自宅で実施した。

観察場所に3種類のおもちゃ、①NEWくるくるチャイム（くもん出版）、②アンパンマンいろいろスイッチひらいてとじて（バンダイ）、または、ベビラボ アンパンマン ひらいてぴよこん！（バンダイ）③ファーストトイTANTAN（くもん出版）、④箱に入った風船数個を準備した。母親には、子どもとおもちゃを介した自由遊びを行うように依頼し、遊んでいる様子を4台のビデオカメラで録画した。入室した後、着席してからの10分間を観察対象とし、母子の遊んでいる様子のビデオ画像を分析した。

分析方法として、第1に、母子のやりとりについての行動記録であるトランスクリプトを作成し、それをもとに、4台のビデオカメラの映像により、子どもが母親を注視した回数を算出した。

第2に、4台のビデオカメラの映像により、母子の視線共有（相手と相互に見つめ合っている状態）時間、および母親が子どもを注視した時間を算出し、検討を行った。

第3に、子どもの視線の分析を行った。本田（2018a）の研究を基に「子どもの全視線」を、「自発（子どもが自発的に母親を見る）型」と「受身（母親の働きかけにより、子どもが母親を見る）型」に分類した。その後、「自発型」視線を「母・見守り（子どもが母親を見るが、その

前から母親が子どもを見ている)型」と「母・非見守り(子どもが母親を見るが、その前は、母親は子どもを見ていない)型」に分類し、検討を行った。両型の違いは、子どもが母親を注視する前から、母親が子どもと注視していたかどうかである。また、「受身型」視線を「母・身体接触(母親が子どもに見るよう誘導しようと子どもの肩をトントン叩くなどしたので、子どもは母親を見る)型」と「母・非身体接触(母親が子どもを引き付けようと、身振りを大きく表現するなどしたので、子どもが母親を見る)型」に分類し、検討を行った。両型視線の違いは、子どもへの直接的な身体接触があったかどうかであった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 子どもが母親を注視する回数は、母子により差があるのか

10 分間のビデオを分析し、子どもが母親を注視した回数を検討した結果、子どもによって母親への注視行動に差があることが明らかとなった。つまり、本田(1018b)の研究において、2歳の時期において差はあったが、その差は、一般的に共同注視や共同注意が形成されるといわれる生後9カ月から12カ月までの時期においてもすでに存在しているということが示唆された。その差を生じさせている要因が、母親の働きかけであるとするならば、どのような方略の違いがあるのだろうか。

##### (2) 子どもが母親を注視する回数と母親の子どもを注視する時間に関連はあるのか

図1、図2の結果から、子どもが母親と注視する回数と母子の視線は関連が示されたが、図3からは、母子により差はあるものの、母親が子どもを注視する時間が長いと母子の視線共有が多く、母親が子どもを注視する時間が短いと視線共有が少ないことが示された。つまり、母親が子どもを注視する時間と子どもが母親を注視する回数には、関連があることが示された。母親が子どもを注視する時間が長いほど、子どもも母親を注視しており、母親が子どもを注視する時間が短いほど、子どもも母親を注視していないことが推測された。このことは、両群の母親が、異なる方略で子どもに働きかけている可能性を示している。

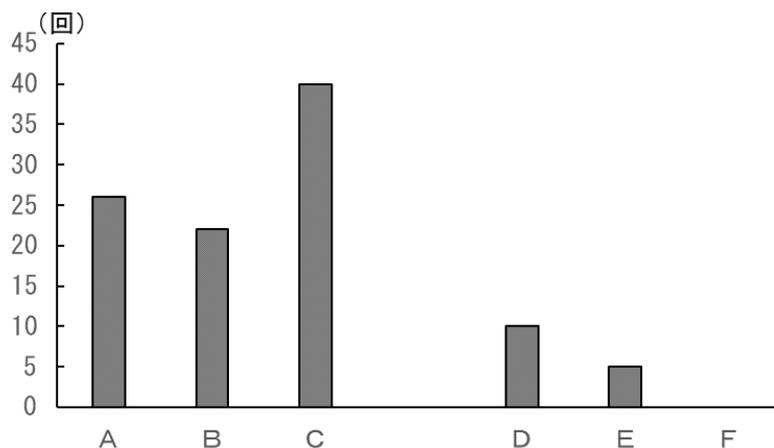


図1 子どもが母親を注視した回数

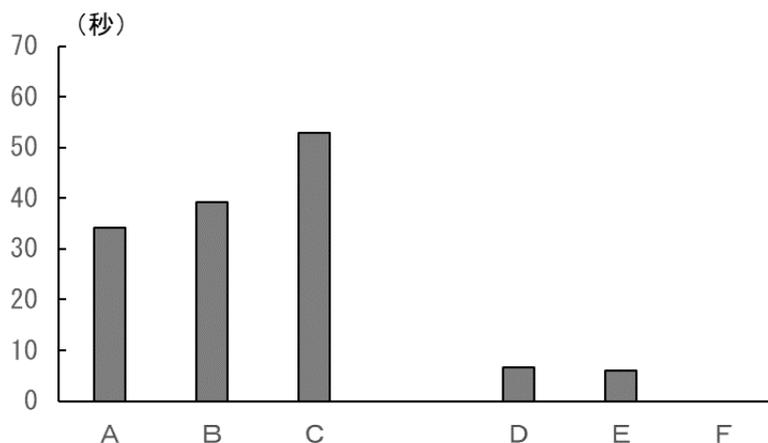


図2 母子の視線共有が成立した合計時間

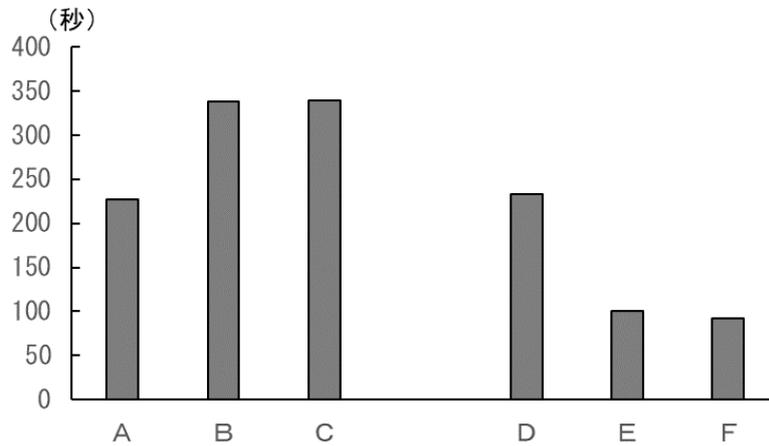


図3 母親が子どもを注視した合計時間

(3) 両群の母親の働きかけの違いは何か

両群の母親の働きかけには、何らかの違いはあるのか。子どもの視線分析から、高群の母親は低群の母親と比較し、子どもを見守ったり、子どもが見るように身振りを大きく表現したりして働きかけることが多いことが明らかとなった。

矢藤(2000)は、生後20カ月から22カ月までの子どもと母親の遊びの場面において、母親が子どもに注意を向けさせようと方略をとる場合、言葉のみよりも指さしやおもちゃの手渡しといった手段を用いる方が、より子どもの反応を引き出すことができることを報告した。矢藤(2000)の対象児は健聴の子どもであるが、健聴の子どもにおいても、話し言葉といった音声言語のみよりも、指さしやおもちゃの手渡しといった視覚言語・視覚情報を音声言語に併せて用いることが、子どもとのやりとりを続けるには有効であることが示されている。

このことは、聴覚情報が限られている聴覚障害児においては、視覚情報がさらに有効であることを示しているといえる。本研究の高群の母親も、①「できた! (おもちゃから出てきたボールを指さす)」といった「指さし」、②「ほら! (膨らませた風船をBに提示する)」といった「提示」、③「さようなら (バイバイの身振り)」といった「身振り」、④「あー (手に持った風船の空気を抜き、小さくする)」といった「操作」などの働きかけを行っていた。母親の音声言語に併せて、意味を補完する視覚的な働きかけによって母親への子どもの注視を促し、視線共有へと導いていることが示された。

しかし、このかわり方は子どもにとっては「受身型」という「母親の働きかけにより、子どもが母親を見る」ものに分類されたものである。Tomaselloら(1986)は、健聴児の注意が向いている対象に母親が注意を向け、その対象について言及するほうが、子どもの言語発達が早いことを報告した。本研究の結果は、Tomaselloら(1986)の報告とは一見矛盾しているものである。これはどのようなことを意味しているのだろうか。

(4) この時期の健聴児と聴覚障害児への働きかけの違いとは

一般的に聴覚障害者がやりとりを開始するときには、相手への身体接触等を活用することが知られている。これらの身体接触は、健聴者に置き換えれば「ねえねえ」の呼びかけと類似している。本田(1018a)の研究では、聴覚障害のある母親が聴覚障害児に働きかける際には、「子どもへの身体接触を図り、母親への注視を促してから働きかける」ことを報告している。これは、手話という聴覚障害者の言語に由来するものであると推測しているが、このことは、聴覚障害児に働きかける際には、健聴者の立場からは一見すると子どもが受身的に見える働きかけが、子どもとの視線共有を促すには重要であることを示しているともいえる。

聴覚障害児と母親が共同注視や共同注意を成立させるためには、子どもと母親の視線共有がより重要となる(本田, 2015)。しかし、生後9カ月から12カ月までの聴覚障害児は、音声言語である日本語の理解やその意味を補完する手話等の理解が困難である可能性がある。そのため、母親の音声言語に気付き、理解を促すためには、母親への注視を促し、母親の表情や身振り、提示したおもちゃなどから意味理解を図る必要がある。そのためには、子どもにとって受身的に見える母親の働きかけにより母親への注視を促し、視線共有の成立へつなげていく必要がある。聴覚障害児と母親との視線共有の重要な機能の一つは、母親の情動に気付くこと(三浦ら, 1986)である。母子間の母親の音声言語に併せた視覚情報の補完が、子どもの気付きを促し、お互いの情動への気づきへとつながり、結果として、子どもが母親への注視の回数を増加させることにつながったのではないだろうか。

ただし、本田(2018b)は、手話等の視覚情報の使用にとどまらず、その使用のタイミングや提示の仕方などの方略の有効性を述べている。つまり、細やかな働きかけの工夫が、母子のやりとりの中で展開されることで、子どもが母親を注視することにつながり、そのことが母子の視線によるやりとり、視線共有の機会を生み出し、それが発達において重要な情動共有の前程となるのではないかと推測される。

〈引用文献〉

- ① 本田和也 2015 聴覚障害児の共同注意の形成に関する考察と今後の展望, 福岡大学臨床心理学研究, 14, 9-15.
- ② 本田和也 2018a 遊びの場面における聴覚障害児と母親の視線共有および母親の働きかけの特徴—健聴の母親と聴覚障害の母親を比較して— 特殊教育学研究, 55 (5), 271-278.
- ③ 本田和也 2018b 遊びの場面における聴覚障害児と母親の視線共有および母親の働きかけ方略の検討—6組の母子を比較して—, 鹿児島女子短期大学紀要, 55, 25-31.
- ④ 狗巻修司 2010 定型発達乳児の「他者の顔を見る」行動の発達の検討—「他者の意図」理解との関連から—, 社会福祉研究, 11, 87-98.
- ⑤ 三浦哲・渡辺淑子・渡部香・山家英次郎・三浦文 1986 聴覚障害児の母子コミュニケーションに関する研究—コミュニケーションの成立に関与する要因について—, 聴覚言語障害, 15, 153-158.
- ⑥ 徳永豊 2009 重度・重複障害児の対人相互交渉における共同注意—コミュニケーション行動の基盤について—, 慶應義塾大学出版会.
- ⑦ Tomasello, M., & Farrar, M. j. 1986 Joint attention and early Language, Child Development, 57, 1454-1463.
- ⑧ Werker, j. f. & Tees, R. C 1984 Cross-language speech perception: Evidence of the neonate and adults speech, Child Development, 45, 456-462.
- ⑨ 矢藤優子 2000 子どもの注意を共有するための母親の注意喚起行動—おもちゃ遊び場面の分析から—, 発達心理学研究, 11 (3), 153-162.
- ⑩ 吉田直子 2011 共同注意の発達の变化その3—言語獲得期の相互作用に関する質的検討—, 中部大学現代教育学部紀要, 3, 43-54.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 本田和也	4. 巻 55
2. 論文標題 遊びの場面における聴覚障害児と母親の視線共有及び母親の働きかけ方略の検討 - 6組の母子を比較して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿児島女子短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 本田和也	4. 巻 61
2. 論文標題 1歳以前の聴覚障害児と母親の遊びの場面における相互的なやりとりの一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ろう教育科学 - 聴覚障害児教育とその関連領域 -	6. 最初と最後の頁 55 - 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本田和也	4. 巻 -
2. 論文標題 遊びの場面における聴覚障害児と母親の視線共有および母親の働きかけに関する心理学的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学博士論文	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----